

・雨でも休まず、199回、200回、・

「小原本陣の森・若柳嵐山の森」

定例活動 1、担い手育成・森整備：10月7日（第一土曜日）参加費400円
（小原本陣の森） 午後3時から「運営会議」、JR相模湖駅ソバ、桂北公民館2F

定例活動 2、里山交流・多様な森活動：10月15日（第三日曜）参加費400円
（若柳嵐山の森） *初参加者：「緑のダム体験学校：1日入校」参加費1000円
・森林の基礎知識・危険対策などを学習、2回目から参加費400円。
・9時15分までにJR相模湖駅前集合

臨時活動、植樹祭：10月29日、10時から。若柳嵐山の森林自由参加、参加費なし

服装：汚れても良い服装（夏は黒色は駄目）、着替え、長袖・長ズボン・滑らない足元
持参：なるべく皮製の軍手、万一の怪我に備えて保険証、弁当・食器（碗・箸）、飲料水

* 注意事項：危険管理・救急体制：森林ボランティア保険他、会として可能な限りの体制を
敷いていますが、「怪我・事故は、自己責任」です。

林業行政との協働

当会が「FSC 認証の森管理者」になったからには、森林活動が楽しい・面白い・癒しというよ
うな活動に止まっているわけには行かない。森林・自然・環境は本来、国家的・地球規模的な視
野で考えるべき課題だからである。法人の自覚を持って行動しなければならない。

当会のミッション：使命・理念は、「森林破壊と言う負の遺産を子孫に残してはならない」とい
う主張と実践行動である。この主張・実践を具現化するためには、全ての人々との協働なしには
達成できない。私心を棄てて他のセクターとの協働によって自らの独自性を自覚すると同時に、
欠けている視点と能力に気づき、反省と謙虚さによってのみ成長への指針が与えられる。

巨大な力を持つ林業行政と協働するからには、森林 NPO としての主体性を失ってはならない。
行政と協働するに際して異なるシステム・原則のゆえに緊張（対立）が並存することもある。協
調と緊張対立が起こった時、冷静さ・公正さを保ちつつ「妥協せず、森林 NPO として誇りを以
て譲れない一線」を守らねば、当会の存在価値は失われる。

活動報告1：小原本陣の森（担い手育成・技術向上の森）：9月 2日（第一土曜日）

報告 佐伯みらよ

すがすがしい秋空の下、30人近くの参加者が集まった。残暑も例年ほど厳しくなく、今日も石井さんの山の手入れをすることとなった。

ボサ刈り班は、二つに分かれ、ベテランさん達は急斜面の末だ、手をつけていないところの処理へ、初心者を含む私たちは通称「唐器橋（急傾斜入り口に取り付けられた小橋）」上の辺りで以前、間伐してそのまま放置されている木を、等間隔に切って整理して見た目に美しく(?) 土留めを作った。初心者チームのもう一つ、先月白石見さんが落とした「ナタ」を見つけるといった課題が架せられていた。実は、これが一番の目的だったが、運良く、作業道のすぐ脇で安易に見つかった。



若い人の参加が確実に増えている。左：近藤さん、右：藤岡君（東急）

一方、富沢さん率いる間伐材搬出チームは、テープを使って材を降ろしたが、これはテープの上に材を滑らせて落とす方法だそうだ。然し、テープが新品のために緩み、人力を余儀なくされ苦勞したらしい。それでも本は降ろした由。

この日は、午後から暑気払いの予定があったので作業は、午前中で終り、やり足りない気持ちと流しそうめんの誘惑との思いで山を降りた。

活動報告2：若柳嵐山の森（里山交流の森）：9月17日（第三土曜日）投稿 山本晶子

先月の活動日には、カキ氷屋は出店していたのに、もう、秋の気配、70人参加。大人数での集まりは出来なかったものの、枝刈りのイガ栗がまだ、季節を演出している。

本日の活動も「初参加者のための・・・緑のダム体験学校班」、「ボサ刈り班」、「案内板設置班」、「山野草探査班」、「堆肥箱でなく・・・カブト虫飼育箱作成班」他、木工工場もフル回転。どれもこれも顔を出したい内容ばかりだが、残念ながら体は一つ、今回は間伐班に入班させて頂き、



新しい新たな、森入り口看板



観察路を巡回し意見の交換を図る

チェーンソーで数本、伐り倒しました。・・と言っても上手く倒せたものではなく思う方向に倒せるようになるまでは、まだまだ修行が必要と感じながらの作業。

10月には枝打ちも始まりかな。

チェーンソーの燃料切れとほぼ同じくして、お昼の時間。今回はジャガイモと玉ねぎのお味噌汁。「分配の仕方が難しいんだよね」と嬉々たる配膳の見せどころ。殆ど残らず、さすがのさばき！。

午後からは午前中の作業班の他に、山中観察道調査隊が発足。山野草を守ること、作業道や歩道の確保、境界確認やこれからの活動をどうするか、など話し合いながら、各エリアには、分かれ道にはユーモアたっぷりの面白い案内板が設置されていて、今後は作業に遅れて合流するメンバーにも分かり易い目印じゃないかな。ひと事のように言っている方向音痴の私が一番助けられる案内板だったりして。

終礼前に材伐出装置のデモンストレーション。木と木にロープを渡し軽く引くだけで丸太を

運べるんですよ。是非是非、早く実用できるようになりたいです。さてさて、これからは、山の色が秋色に変わっていくのが楽しみですね。

若柳嵐山の森：終りの会（運営会）

活動終了後の「終りの会（運営会）」では、山本さんの活動報告のように、入江仲間提案の「嵐山・遊歩道観察」の結果を皆で話し合った。平地・軟斜面・急斜面、様々なこの広い森の姿を見せる将来を考えるのに、そう、簡単に結論らしきものが出せる筈も無し。「森全体を考えながら」、この森の各地域・ゾーンごとに、そこに相応しい施策を続け時々、それで良いかを考えながら活動を続けよう」と言うことで締めくくった。



創造的・理想の森をどのように実現するか



暑い夏休みはお休みにしようかと言う中、管子公民館は広い会議室いっぱいの、100名を超える方々がお集まりでした。地元の歴史研究家、52歳の天野 要さんの「故郷道中管子乃今昔」出版記念講演会でした。

甲州古道プロジェクトメンバーの「大月学研究会」の皆さんによる手作りの小冊子ですが、150ページにもなる大作です。管子の地名の成り立ちから現在まで、300年近くを詳しく多方面に渡って、研究調査された結果が集積されています。

ご本人天野 要さんのお話が始めると突然、会場の真ん中に進まれて「マイクは使わないから！」と、とても90歳を迎えている方とは思えないお元気さです。歴史の話だと程々の雰囲気ですが、会場はにぎやかな笑い声の中で「少しはお休みください」の声がかかるほどでした。会場の参加者の中には「管子追分人形保存会」の皆さんや、管子峠の本当の道を復活しようとする市民団体など地元を大切にされる方々が居られ、熱心に関心入っていました。

主催の「大月学研究会」は、道中マップや一里塚調査、道標設置など活発な活動を進めています。地元の皆さんが、地元の歴史を振り返って次の世代に残そうという意気込みが感じられ、とても頼もしく思いました。自分の住んでいるところを良くしていくのは、そこに住む方々の力の結集で実現します。縄文から歴史が残る管子を、これからも注目して行きましょう。

「甲州古道ウォーキング」の大きなマップが関係駅に貼られています。相模湖駅のものは、改札からの正面にドーンと貼ってあります。是非、ご覧ください。



上野原市の井田さんは、古道ルート図の最大の功労者



JB相模湖駅改札口正面に貼ってある。

- 4年前、相模湖町が甲州古道の道標4本の注文を出してくれた。設置時、誰かが「よし、それなら管子峠まで繋ぐぞ!」と言った。相模湖町(中里さん)、藤野町(西村さん)、上野原市(井田さん)、大月市(河西さん)がそれぞれの町を引き受けてくれた。4年目現在、各地でこのようなことになっている。石村記

神奈川県：林業行政とのキッカケ・経過・現在

新しい参加者のために行政との協働のキッカケと現在に至る経過を簡単に報告しておく。



有能の士、今は亡き高梨さんの後姿

9年前の10月、相模湖交流センターで「桂川・相模川流域シンポジウム」という大会があって、1階ホールの壁に当会の活動を紹介します。写真パネルを掲示した。

これを熱心に覗き込んでいる人がいたから声を掛けたら「私は、神奈川県の本務課の高梨と言います。貴方は何故、森林に熱心なのですか?」と聞かれた。

そんな事から交流が始まったのだが、岡崎前県知事が「水源環境の保全・再生政策」を立ち上げ県内各地で公聴会を始めた。高梨さんとの関係から、これらのパネラー、コーディネートをする事になり、この政策立案に関

わるようになった。

8年経過して2005年には「かながわボランティア基金21」により、県との森林整備事業を協働することとなり、昨年10月にFSC認証の森管理者となって県とは更に密接な・真摯な協働事業を進めている。

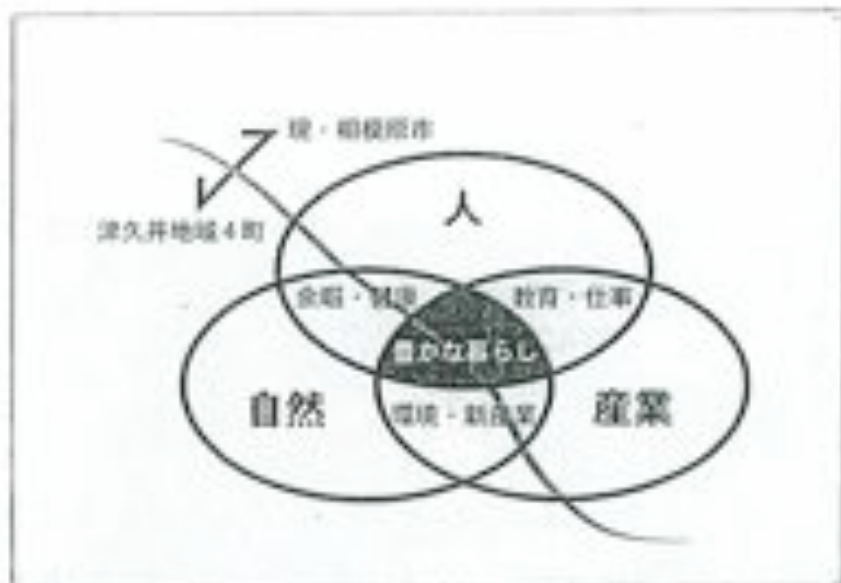
9年前、高梨さん(当時・課長代理)と知り合って1年2ヶ月経過した2000年の1月末、突然、席で急逝したと訃報を受け取った。彼とは「森林保全・再生のため力を合わせましょう」と硬く約束していた。来年から20年間の「水源環境の保全・再生政策」が実行に移されるが、その約束もあって神奈川県と森林活動を協働する「NPO 緑のダム北相模」として何んとしても、この政策を成功させねばならない。

相模原市と森林を協働することとなった。

今年の3月20日を以って相模湖町・津久井町は、相模原市と合併した。これによって相模原市は一挙に森林率ゼロから58%になった。当会は相模原市で唯一の森林NPOだからということで「相模原市環境審議会・委員」を拝命したことは先月、報告した。拝命した以上は、是非ともお役に立ちたい。

「NPO 法人自遊クラブ」の山本さんが熱心に動いてくれて相模原市内の環境団体が集まり始めている。また、相模原市の環境保全部や教育委員会管轄にある公民館などとも連絡が取れ、8月24日には、大野北公民館の34名が斎藤学校長の指導する「緑のダム・体験学校」を受講してくれた。回収率78%のアンケートでは、23名が参加して良かった、1名が嫌だったと答えてくれたから、評価を受けたと思う。

受講者の一人長崎さん（相模原商工会議所・都市産業研究会会員）から貰った名刺に右の図が書いてあった。斜めに走る曲線は相模川を表している。「新しい森林産業を創出する」と謳って「環境と経済が調和する」途を探している当会として同じ方向を目指していることから行動を共にしようと話し合っている。実際との連携の途を探していたから良い出会いだと嬉しい。長崎さんは「FM さがみ」を協同経営しており、「石村さん、森を熱く語ってくれ」というから「喜んで！」と30分番組2本を収録した。10月には、都市産業研究会として15名ばかりが「緑のダム体験学校」を受講してくれる予定。



活動アンケート第7回

FSCは、問題があれば解決することを求めている。そこで当会活動のどこに問題があるかアンケートを行った。208件のアンケートに対して38項目、58件の回答が得られた。昨年11月から今年6月までの全般的なこと(組織・資金・情報公開・社会的責任)について解答してきた。今回は間伐材の活用についての質問に答える。回答に対する疑問・意見・反論、是非のない・異論を提供されたい。

(間伐材等の管理)

質問：この森林の所有者：鈴木さんは、大径木の生産を考えておられる。そこで間伐は択伐と云うことになります。最近、県産材で家を建てたいという人との接触が始まっています。どのように対処しているのでしょうか（正会員）



回答：この森の木ではありませんでしたが試みに2年前、県産材で家を建てたい人に約5立米、お世話をしました。原価が10万円で売価が12万円（利益2万円）でした。昨年、同様な方法で20立米、36万円の利益がありました。

また、昨年は鈴木直子（設計士）さんが独自に、県産材住宅を2棟完成させました。匠の会の元会長をしていた小林さんに見せたら、「やる気の問題だなー、執念の問題だなー」と驚いていました。

今年2月、地主の鈴木さんの浅谷側の杉巨木林の痛んだ木（欠頂木、曲がり木、枯れ木など）を除去しました。その中から使える木を選んで製材して建具組合と機器メーカーに買ってもらいました。地主さんに立米当り13,000円が払えます。

この材は、FSC認証材として原産地証明・製材証明を添付して引渡しました。このことを人は特殊のケースと言いますが、最後のページに「木を使うこと 森を守ること」を連載してくれている鈴木直子設計士（当会会員）は、確実に地主さんにお金を支払う仕組みづくりを進めています。

木が売れないので森に手を入れられないというのが常識になっていますが当会の経験では何故、そのような常識があるのかが理解できません。この冬には、協力協約で整備したB地区のヒノキでFSC材：学童机椅子を作ります。1セット2万円で納め、来秋の新学期には、ヒノキの香りのするFSC材：机椅子で子供たちが勉強できます。地主さんに立米当り1万円を支払うことが出来ます。現在、県産材住宅の相談が2件、来ています。



林業行政は何処かおかしい。業界の仕来りや規制の概念に囚われない、柔軟で自由な発想と行動の出来る森林NPOが問題解決の糸口を探り当てかかっています。会活動とは別に私と同じ考えを持つ人が集まって、県産材流域材で家建てたい人に喜んでもらえる家が提供できる仕組みづくりに取り組みようと話し合っています。こんな動きは和歌山(熊野川流域)や岐阜(木曾川流域)などでも始まっています(石村記)

WS(材簡易搬出：布製)からTC(テーブル式滑降器)へ進展

わが国では、森林地主の森林所有面積は極端に狭く、材を出すのに他人様の土地を通すのが困難であるから何か工夫はないかと考えたNPO環境資源保全研究会の吉田さんが、消防用の脱出シューターを使って他人の森の空中を通すことを考えた。富沢仲間が熱心に応援して少しずつ改良を加えている。これに協力している石綿産業の石綿社長が強化テープに滑車を走らせることを考え付いた(写真)公開実験を見せてくれたのだが、ナカナカの出来で、折を見て県など森林関係者に紹介したいと思っている。



これは何も、材搬出だけでなく都市部での災害時に応用できるであろうから、今一步で実用の道が開けそうである。森は、いろんなことに力を貸してくれる。

8月後半、(有)東林業さんと新月伐採の現場にお客様と伺いました。神奈川県で新築を計画中の二家族です。東さんはFSC認証の森林から100%新月伐採で木材を伐りだしています。そしてCOC認証も取得しています。見学場所は、6.5年生のヒノキの森です。今年の秋から始める予定の住まいに使われる木材の切り出し現場でした。立っているだけでもきつそうな斜面でチェーンソーを使い、一本一本伐りだしていきます。倒れるたびにドーンとお腹に響く音、その一回一回に子供たちが反応します。

新月伐採は、葉をつけたまま山の中で一定期間枯らしめます。新月に近いので木自身が水を吸い上げていない、伐られてからも葉からどんどん水分が蒸発するので狂いにくい、反りにくい、カビにくいなどの利点があります。東さんは、一年中新月伐採で伐りだし可能なことを検証済みです。同時にCOC認証も取得しているので生産流通の過程が管理されています。

お客様は「流域材」を使うことで水源の森を守ることに関心を理解していただいた上での見学会です。新月伐採・FSC認証・COC認証も理解していただきました。他とは差別化をはかり、より良い木材を流通させる東さんの考えも理解いただきました。それも実際に現場を見せることによって、より一層深まったようです。

次回は、製材所の見学を報告いたします。ここもCOC認証を取得しています。生産～流通～製品までしっかりと管理されています。難しい大人たちの周囲で子供たちは年輪を数へたり、切れ端を工作用に持ち帰ったり、森林を満喫していました。

実際に森の現場から、生産・流通・製品（家）になる姿を生き生きと伝えてくれる鈴木設計士の報告は、どんな本、話よりも説得力がある。それは、今月号に掲載した森仲間の記事にも同じことが言える。こんな事に関われる自分は幸せ者だと、森と活動を支えてくれる人々に感謝するばかりだ。石村

活動のモットー：急がず、楽しく、無理せず、休まず。ボチボチと・・・
そして、沢山の参加で森はよくなる。

名 称：さがみ湖・森づくりの会：NPO法人緑のダム北相模/森林部会

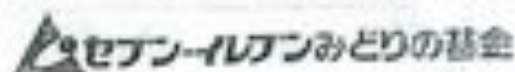
事 務 局：154-0023 東京都 世田谷区 若林3-35-9

発行人：石村 黄仁 T&F 03-3411-1636

HP：midocinodam.jp

E-mail：moritomo@rk9.so-net.ne.jp

協 働 団 体：神奈川県(企画部、環境農政部、県北地域県政総合センター森林部)、



ご支援団体：WWF ジャパン、イオン財団、市民社会チャレンジ基金、神奈川県建築組合
東急コミュニティ